

未来を拓くネイチャーポジティブ・アクション

自然と社会をつなげる仕事



つなげる自然、
つなげる社会

CHIIKAN



皆さんは生きものが少なくなっていると感じますが、
自然が劣化している実感はありますか？

私たち株式会社地域環境計画、通称「ちいかん」は、

設立以来数多くの開発事業の環境アセスメントや官民の生物多様性保全の取り組みに関わってきました。
生きものとの共生の最前線で生物多様性に取り組んできた自負があります。

しかしながら、「その結果は？」と考えると、どの程度貢献できたのか疑問に思うことがあります。
実際、ご存知のとおり、地球の自然環境は大きく劣化しています。

それは日本も例外ではありません。

そのような状況の中、2030年を目標年として、この下降トレンドに歯止めをかけ、
回復基調に転じさせようという「ネイチャーポジティブ目標」が掲げられています。

長年、生きものと共に歩んできたからこそ、私たちには従来を超える規模とスピードで
力を尽くす使命があると感じています。

さらに従来の枠にとどまらず、「自然や生物多様性が一人でも多くの人の幸せにつながる事業領域」へと
活動の幅を広げていかなければならないと思います。

そこで、その方向性を明確にするため、設立45年目の2025年にリブランディングを行い
「つなげる自然、つながる社会」をブランドメッセージとして掲げました。

この冊子では、その第一歩として私たちのビジョンを表現しています。

新たな挑戦を始めるちいかにご期待ください。

高塚敏

株式会社地域環境計画
代表取締役

C o n t e n t s



探そう！
生きものと人間社会の
幸福な関係を …… 4



都市のネイチャーポジティブ・アクション …… 6
里地・里山のネイチャーポジティブ・アクション …… 8
山地のネイチャーポジティブ・アクション …… 10



フィールドで大活躍！
調査道具図鑑 …… 12

10年後、どんな未来にしようかな会議
「生きもの屋」が社会のためにできることって？ …… 14



ちいかんができる6つのこと …… 18

ちいかんメンバーに聞く！
あなたの“推し”は？ …… 24

地域環境計画の新しいロゴマーク …… 22

ネイチャーポジティブとは？

Q ネイチャーポジティブ 環境省 Search

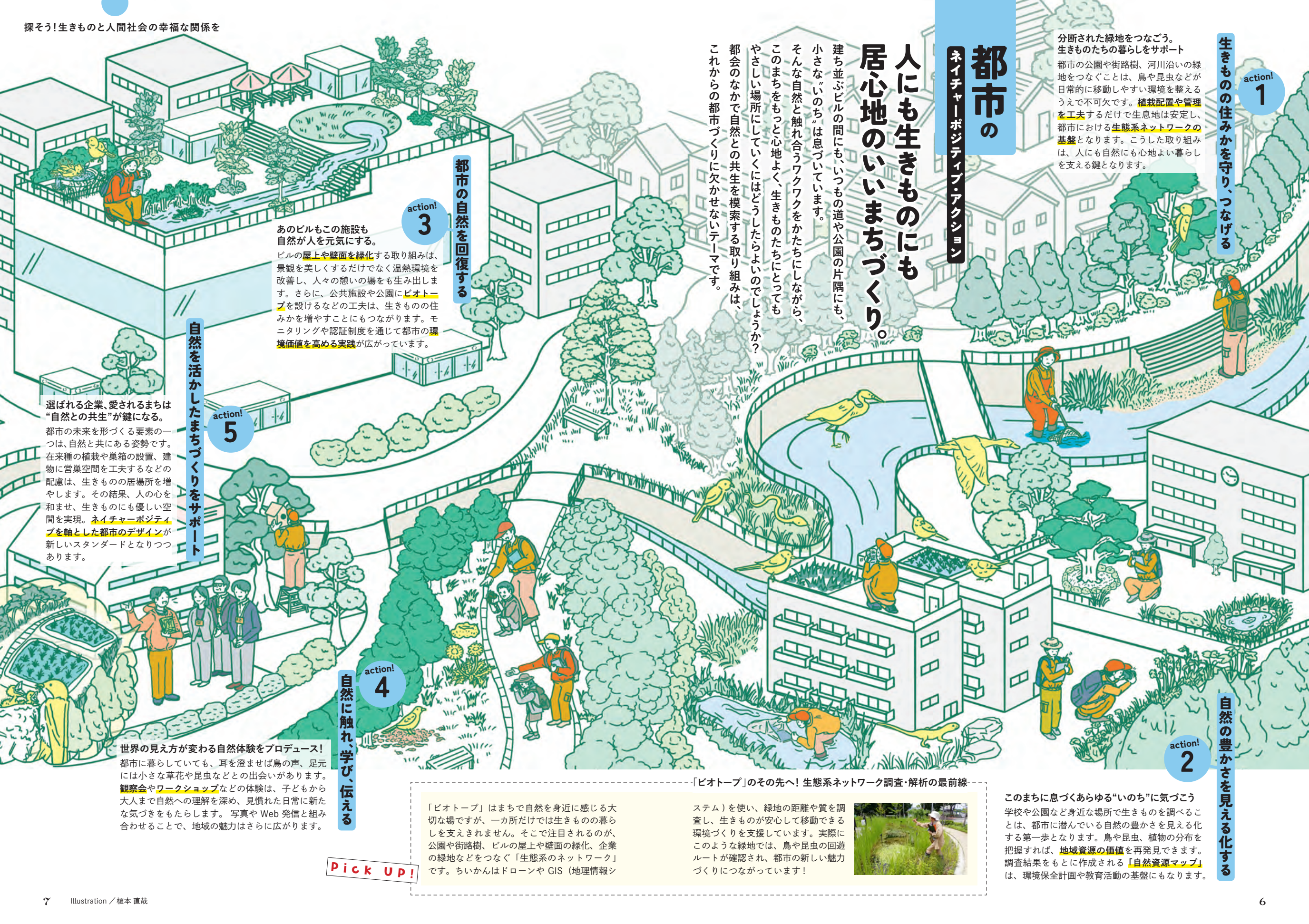
都市のネイチャーポジティブ・アクション 6

里地・里山のネイチャーポジティブ・アクション 8

山地のネイチャーポジティブ・アクション 10

探そう!生きものと人間 社会の幸福な関係を

いつもと少しだけ視点を変えて世界を眺めてみると、大都会にも、里山のあぜ道にも、遙か向こうの山奥にも、数えきれないほどたくさんの生きものたちが、それぞれの居場所で、それぞれの生活を営んでいます。ちいかんは、そんな生きものたちと共に生き、共に育み合いながら、人も生きものも安心して暮らせる社会を目指す、生きものの調査のスペシャリストです。人間も、多種多様な生きものも、同じ地球のチームメイト。どうすれば共に心地よく暮らしていけるか、さまざまなシーンにおけるヒントを一緒に探ってみましょう。



生きものの住みかを守り、つなげる

action!
1

分断された緑地をつなごう。
生きものの暮らしをサポート
都市の公園や街路樹、河川沿いの緑地をつなぐことは、鳥や昆虫などが日常的に移動しやすい環境を整えるうえで不可欠です。**植栽配置や管理を工夫**するだけで生息地は安定し、都市における**生態系ネットワークの基盤**となります。こうした取り組みは、人にも自然にも心地よい暮らしを支える鍵となります。

都市の

ネイチャー・ポジティブ・アクション

人にも生きものにも
居心地のいいまちづくり。

建ち並ぶビルの間にもいつもの道や公園の片隅にも、小さな「いのち」は息づいています。
そんな自然と触れ合うワクワクをかたちにしなが、このまちをもっと心地よく、生きものたちにとってもやさしい場所にしていくにはどうしたらよいのでしょうか？
都会のなかで自然との共生を模索する取り組みは、これからの都市づくりに欠かせないテーマです。

都市の自然を回復する

action!
3

あのビルもこの施設も
自然が人を元気にする。
ビルの屋上や壁面を緑化する取り組みは、景観を美しくするだけでなく温熱環境を改善し、人々の憩いの場をも生み出します。さらに、公共施設や公園に**ビオトープ**を設けるなどの工夫は、生きものの住みかを増やすことにもつながります。モニタリングや認証制度を通じて都市の**環境価値を高める実践**が広がっています。

自然を活かしたまちづくりをサポート

action!
5

選ばれる企業、愛されるまちは
“自然との共生”が鍵になる。
都市の未来を形づくる要素の一つは、自然と共にある姿勢です。在来種の植栽や巣箱の設置、建物に営巣空間を工夫するなどの配慮は、生きものの居場所を増やします。その結果、人の心を和ませ、生きものにも優しい空間を実現。**ネイチャー・ポジティブを軸とした都市のデザイン**が新しいスタンダードとなりつつあります。

自然に触れ、学び、伝える

action!
4

世界の見え方が変わる自然体験をプロデュース！
都市に暮らしていても、耳を澄ませば鳥の声、足元には小さな草花や昆虫などの出会いがあります。**観察会やワークショップ**などの体験は、子どもから大人まで自然への理解を深め、見慣れた日常に新たな気づきをもたらします。写真や Web 発信と組み合わせることで、地域の魅力はさらに広がります。

Pick Up!

自然の豊かさを見る化する

action!
2

このまちに息づくあらゆる“いのち”に気づこう
学校や公園など身近な場所で生きものを調べることは、都市に潜んでいる自然の豊かさを見る化する第一歩となります。鳥や昆虫、植物の分布を把握すれば、**地域資源の価値**を再発見できます。調査結果をもとに作成される**「自然資源マップ」**は、環境保全計画や教育活動の基盤にもなります。

「ビオトープ」のその先へ！生態系ネットワーク調査・解析の最前線

「ビオトープ」はまちで自然を身近に感じる大切な場ですが、一カ所だけでは生きものの暮らしを支えきれません。そこで注目されるのが、公園や街路樹、ビルの屋上や壁面の緑化、企業の緑地などをつなぐ「生態系のネットワーク」です。ちいかんはドローンや GIS（地理情報シ

ステム）を使い、緑地の距離や質を調査し、生きものが安心して移動できる環境づくりを支援しています。実際にこのような緑地では、鳥や昆虫の回遊ルートが確認され、都市の新しい魅力づくりにつながっています！



里地・里山の

ネイチャー・ポジティブ・アクション

まわりの自然を育むことで
暮らしはもっと、ゆたかになる。

畑のとなりの雑木林や、神社のまわりの森。

地域で大切にされてきた小さな自然も、
時代とともに荒れてしまうことがあります。

けれど、人が少し手を差し伸べれば、
再び息を吹き返し、生き生きと輝き始めます。
育て、守り、時には活かして。

ゆたかな里山を次の世代へつなげていくことは、
これからの地域にとって欠かせない営みです。

地域と一緒に自然を育てる

action!
1

地域みんなで自然と向き合う、
“ヒント”探しの輪

里地・里山を守るには、地域全体での関わりが欠かせません。企業や学校、住民が調査や保全活動に参加することで、環境の変化に気づき、理解も深まります。植物や昆虫を観察する**住民参加型モニタリング**は、科学的データを集めつつ学びも促進。**CSR活動**として自然環境保全を支援する例も広がり、地域づくりのヒントが見つかります。

生態系にやさしい
管理を支援する

action!
4

“いつものやり方”だった管理を見直すことで、未来が変わる。

農地や神社林、企業緑地の管理も、人の手の加え方次第で生態系の姿は変わります。農薬や除草剤の多用、過度な下草刈りは便利な反面、影響も無視できません。いまは**生物多様性の視点を取り入れた管理**が求められています。緑地の力を引き出し、人と自然が共生できる環境を未来に残す。そのための知恵と工夫が必要です。

自然を軸に地域を元気にする

action!
3

エコツーリズムやイベントを通じて
自然の魅力をアピール

里地や里山には**地域固有の自然や文化**が息づき、それを観光や学びに活かすのが**エコツーリズム**です。観察や暮らし体験を組み込んだツアー、地域ブランドや観光振興につながるイベント、パンフレットや映像発信は人と地域を結びます。自然を「楽しむ」だけでなく「学び、共有する」ことが、地域の誇りや未来を育む力になります。

地域の自然の活用方法を戦略にする

action!
5

その土地に棲む生きものからまちの戦略が見えてくる!

地域の自然と共生するには、被害を防ぐ工夫と資源活用の両立が重要です。果樹園ではサルやハクビシンの食害対策に**行動特性を踏まえた防除法**を導入。一方で**在来植物を活かした景観づくり**など、新たな資源利用も注目されています。自然を課題でなく資源と捉え直すことが、持続可能な地域の戦略を描く手がかりとなります。

PICK UP!

ちいかんは、日本各地での自然環境調査や生物多様性地域戦略策定支援の実績をもとに、里地・里山の自然を活かしたエコツーリズム企画を手がけています。農山村での暮らし

いろいろな生きものとの出会い! 全国津々浦々のエコツーリズム

体験や草原・森での観察に加え、自然資源を活用したモデルツアーなど多彩な事例を展開。全国ネットワークを活かして地域ごとの魅力を組み合わせ、「ここでしか得られない体験」を提供しています。



森や里山を育てなおす

action!
2

時代にとり残された林や草地をもう一度、育てなおそう。放置され荒れた林や草地も、人が手を入れれば豊かさを取り戻せます。**下草刈りや間伐**で林床に光を届ければ、多様な生きものが戻ってきます。地域と共に進めれば継続性も高まり、風景や生態系が少しずつ復元します。さらに、**外来種のモニタリング**や防除も加えることで、健全な自然の循環を守ることができます。

そこにしか咲かない
花がある。雲を超えていく
高山帯の世界へ。

高標高地域の植物や希少種の
保全には、険しい登山を伴う
調査が欠かせません。標高の
高い場所で生育状況を把握し、
登山道の配置を工夫する
ことで、踏み荒らしの影響を
防ぎます。パンフレットや現
地解説を通じて**保護の意義を
伝える**ことも重要です。調査
と啓発を重ねることで、かけ
がえのない自然を未来へつな
ぐことができます。

高山植物や希少種の保護・生息環境整備

action!
4

あの登山道も、
国立公園のルールも、
みんなが楽しむための
“デザイン”。

国立公園の登山道やトレイル
は、**適切なゾーニング**で利用
を分散させ資源の持続性を担
保します。掲示物でルールの
理由を伝えれば、来訪者の理
解と協力も得やすくなります。
さらに、クイズ形式の観
察マナーや、体験型の工夫を
加えることで、**自然を守りな
がら楽しむ**新しい利用のあり
方が広がっています。

国立公園の魅力活用・ルール普及

action!
3

人里から遠く離れた森や、山間を流れる溪流のほとりには、
今では希少となった“いのち”も確かに受け継がれています。
失った多様性を元に戻すことは困難。唯一無二の生きものたちを
未来へ送り届けることが今を生きる私たちの務めです。
大切なのは、見守るだけでなく、適切に手を差し伸べること。
山を守り、資源を維持する仕組みづくりの視点が重要です。

いのちが宿る美しい森を
未来へつないでいくために。

ネイチャーポジティブ・アクション

山地の

サンショウウオが棲む溪流で
生きものたちの“いま”を見つめる。

山や川に棲む生きものを知ることは、
自然を守る第一歩です。溪流調査で
は石を動かしサンショウウオやその
卵囊（らんのおう）を探索します。時
には素早く移動するカワネズミの姿
に出会うこともあります。こうした
記録やモニタリングを重ねることで、
河川環境の変化や課題が浮かび上
がり、健全な生態系を未来へつなぐた
めの基盤づくりとなります。

action!
1

山や川の自然を調べる

自然のはたらきを災害対策に活かす

action!
2

森や湿地の力でまちを守る!
環境から考える災害対策って?

森林の下草管理や間伐は豪雨時の斜面崩
壊を防ぎ、湿地や休耕田は洪水を調整す
る役割を持ちます。防鹿柵を設置するこ
とで 森の植生が守られ、川辺の草木を活
かした多自然型護岸は被害をやわらげま
す。こうした**自然の仕組みを活かした防
災・減災**は、人と生態系の双方を守る持
続可能な手法として注目されています。

希少な生きものを守る

action!
5

カモシカも、クマタカも。希少ないのちを、つなぎたい。
森林に棲むカモシカやクマタカなどの希少種は姿を確認
することすら難しく、繁殖状況を知るには長時間の張り
込みや地道な調査が必要です。こうしたデータの積み重
ねは、**生息環境の改善や保全計画づくり**へ直結します。
現場での粘り強い調査と科学的根拠をもって、山地の豊
かな生態系を未来へとつなぐことができます。

Pick Up!

イヌワシやクマタカなどの猛禽類調査は、真夏の炎天下
や真冬の厳寒、突発的な荒天、さらにはクマやヘビといっ
た危険生物との遭遇など、過酷な日常です。保全のため
には巢や餌場の特定、行動圏の把握が不可欠なため、綿
密な調査計画を策定し、当日は出現状況や地形を読みな
がら緻密な作戦で臨みます。急峻な斜面を登り、尾根や

その姿を捉えるまでもひと苦勞!山地で挑む猛禽類調査の舞台裏

谷に配置した調査員が双眼鏡やスコー
プで数キロ先の個体を発見・追跡し、
無線で連携しつつ記録を残します。体
力・知識・経験に加え、仲間との信頼
関係も欠かせません。その成果はチー
ムの総力によってもたらされます。



クマタカ

フィールドで
大活躍！

調査道具 図鑑

エクマンバージ サンプラー

湖や川底の泥をかき
取って、採集するた
めの道具。ゴカイや底生
生物、貝類など、水辺
の底に棲む生きものの
調査に用いられる。



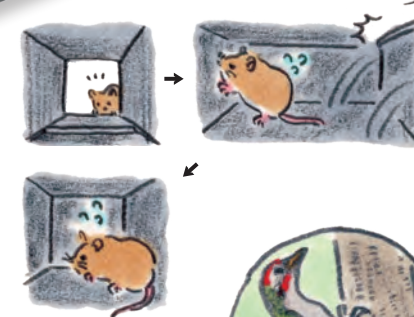
双眼鏡

離れた位置から野生動植物を
観察し、記録するための光学
機器。状況に合わせて手持ち
型の双眼鏡と三脚に据えるス
コープを使い分ける。



シャーマントラップ

小型哺乳類を生け捕る箱型ト
ラップ。餌につられて中へ入
るとふたが閉じるしかけ。印
をつけた個体の再捕獲による
個体群調査も可能。



捕虫網長柄ネット

昆虫採集の基本となる道具。
柄が長いと高い枝や水辺でも
使い勝手がよく、チョウやト
ンボ、バッタなど幅広く捕獲
することができる。



全国各地の森や河川、山奥から
都市部まで、その地に息づく
多様な生きものの調査を行う
ちいかん。それぞれの現場では、
観察や採集に欠かせない道具が
活躍しています。中には
「いったい何に使うんだろう？」
という不思議な形のもので。
数えきれないほどある道具から、
その一部をご紹介します！

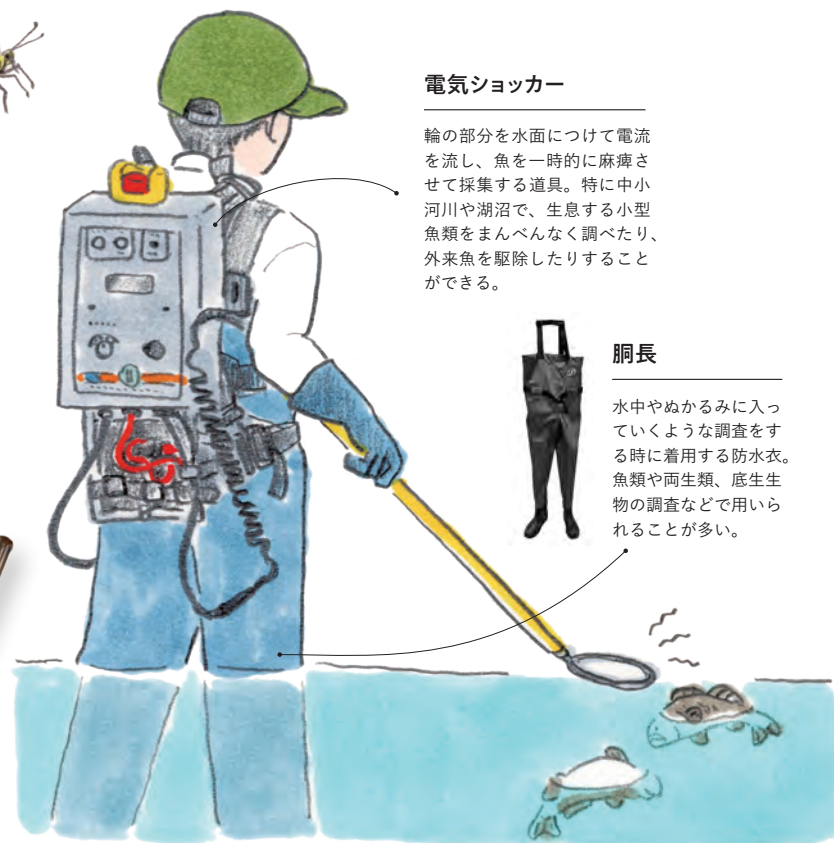
トレイルカメラ

センサーで動物の熱や動きを
感知し、自動で写真や動画が
撮れる屋外設置型カメラ。シ
カやイノシシなどの哺乳類か
ら鳥類まで幅広く記録。



電気ショッカー

輪の部分をついて電流を流し、
魚を一時的に麻痺させ採集する道具。特に中小
河川や湖沼で、生息する小型
魚類をまんべんなく調べたり、
外来魚を駆除したりすること
ができる。



胴長

水中やぬかるみに入っ
ていくような調査をする
時に着用する防水衣。
魚類や両生類、底生生
物の調査などで用いら
れることが多い。



超音波探知器

コウモリが発する超音波を検
知して、人にも聞こえる音に
変換する機器。可聴化する
ことで鳴き声の違いを判別し、
種を特定する。



三角ケース

採集したチョウやガ類、その
他小さく柔らかな昆虫類を傷
めないように三角紙に包んで
一時的に保管するためのケー
ス。革製や金属製があり、調
査時の持ち運びに便利。



どうらん

採集した植物標本を曲げ
たりつぶしたりすること
なく運べる携帯箱。主に
押し葉標本用。草木を平
らな状態で安全に持ち運
ぶことができる。



ジョレン

ステンレスや鉄製の熊手で川
底の石や泥をかき、その中
にいる貝類などの底生動物を引
き上げることができる。



「生きものの屋」が 社会のために できることって？

各地の拠点から黒川の森^{*}に集まった
ちいかんのメンバー4名。

自然と社会をつなぐ

「生きものの屋」たちに聞くのは、

調査現場のリアルや

ネイチャーポジティブへの思い。

この価値を、いかに社会へ伝えるか。

そして10年後の未来を

自分たちはどう描くのか。

本音の座談会、開幕です。

日々の調査の中に

一期一会の貴重な出会いが

——ちいかんの仕事は、一般の方からするとわかりにくいかもしれませんが。たとえば「環境アセスメント」は、開発事業が環境に与える影響を調べますが、ちいかんは

中でも生きものを専門にしています。その他、動植物全般を対象に生きものと人間をめぐるさまざまな社会課題に日々取り組んでいます。少し具体例を挙げてもらえますか？

田中 アセスメントではないですが、たとえばヒアリの調査は、人を刺すというニュースが出た時に各自自治体や港湾管理者から一気に依頼が来ました。そういったそのときどきのニーズがありますよね。最近では、企業が所有する緑地を「生物多様性の観点で説明してほしい」といった相談が増えていきます。

村島 大規模な開発事業予定地の調査などでは、1年間を通して植物や鳥、魚、昆虫など幅広く調べて、その結果を取りまとめて報告書にしています。

——仕事の醍醐味は、どんなところにあると思いますか？

川崎 やつぱり、その土地ならではの生きものに会えることじゃないでしょうか。別に珍しい種じゃなくても、そこで暮らしている鳥と出会えるのは一期一会で、

※ 神奈川県川崎市にある「西黒川特別緑地保全地区」。2024年より当社が管理を行っています。

10年後、どんな未来にしようかな会議



私たちには、やらなければならないことがある。

もっと社会の意思決定に活かせる調査をしたい！

自然界の仕組みに気づいた時の感動を、多くの人に伝えたい。

その地で暮らす鳥との出会いは、まさに一期一会！

すごく楽しいです。もちろん、希少な猛禽類の巣を見つけられた時などもうれしいですね。

——猛禽類調査も大変ですよね。

川崎 猛禽類は、対象の山に1カ月につき数日、数名で散らばって特定の範囲を観察し続けます。飛んでくるルートをもとに、巣がある場所などを推測しながら、1年半ほど調査するんです。

——まるでシミュレーションゲームみたいですね。調査って、本当に根気がいる仕事だと思います。**寺下** 調査では、事実をきちんと伝えることに关して本当に誠実にやっています。そうじゃないと自分が許せないというくらい、そこは真摯に。

田中 みんな、とにかく生きるのが好きな人ばかり。月々金で鳥の調査をしている人に週末は何をするのか聞いたら、「鳥を見に行く！」って(笑)。

村島 都会にいるより、山に行くほうが落ち着くんですよ。

田中 そんな人ばかり！

——記憶に残る仕事は？

社や自治体に対して、調査や分析結果を示しながら、どうしたら生きものとの共生社会に向かえるかを提案していきたいです。自然にとつても人にとつてもメリットになるような、全部がプラスになる道を提案することは、私たちならできることだし、やらなきゃいけないことだと思っています。

——その提案のチャンスは、どうしたらつくれると思いますか？

寺下 やつぱり、企業や自治体にとつてもメリットになることを丁寧に説明しながら、アプローチすることじゃないでしょうか。「自然共生サイト」や「ESG投資」なども入口になりますよね。

——「自然共生サイト」は、企業や地域が行う自然保全の取り組みを環境省が認定する制度ですね。その土地が生物多様性の保全に効果がある区域と位置づけられます。「ESG投資」は、Environment(環境)、Social(社会)、Governance(企業統治)の要素を重視した投資のことですね。

田中 僕は、石川県の白山に登って標高2000mのところでオオバコ

の交雑調査をした時。お風呂にも入れず、宿泊所は2畳の狭苦しいところに男2人で3日間。でも、絶景でね。一緒に行った新人の彼が「この星空を彼女に見せたい」と言っていて、前向きだなあと思ったよ(笑)。あとはやつぱり、最後に分厚い報告書をまとめ上げた時の達成感かな。

——逆に、大変だと感じるのは？

川崎 調査対象によつては、連日朝がたの2〜3時に起きて現場に向かうことも。さすがに体力的にはハードですが、いざ生きものに会えると、「よつしやー！」とうれしくなります。生きものが相手なので、こちらに変則的に動かざるを得ないんですよ。

ネイチャーポジティブはお金に換算しづらいのが悩み

——一方で、やっついていて矛盾を感じることはありますか？

寺下 私たちが調査で自然の情報をたくさん集めても、情報を蓄積

には、会社としての強さが必要です。ちいかならしい、それぞれの専門性を発揮して認められれば、発言力も増すし、もつと国の政策にも関与していけると思う。

田中 あとは、地域に密着した動きをもつと加速したいですね。うちは全国に支社があるから、各地域に深く入って、それを全支社で共有すれば、すごいパワーになると思うんです。それをベースに社会に対して発信していけたら、説得力も高まるんじゃないかな。

寺下 国や自治体、研究者や地域の人たちとどう連携していくかも大事です。ハブ的な役割を担うことも、私たちができる大切な役割だと思っています。

——その視点でいくと、ちいかなが社会に働きかけられることはまだありそうですね。

川崎 僕はやつぱり、学校教育を変えたい。特に、理科の教科書。叶うなら教科書づくりに関わってみたい。今なら、アプリのような形もとれますよね。



田中 一男

名古屋支社長。植生が専門。前職でもこの道10年、各分野を手がけたあと現職。現場調査に出ながら社員のワークライフバランス向上にも注力中。

Tanaka Kazuo



村島 祐希

大阪支社勤務。小さな頃から動物好きで、GIS(地理情報システム)技術者としてアルバイト後、正社員に。両生類、爬虫類、ほ乳類を手がける。

Murashima Yuki



川崎 裕次朗

中四国支社で鳥類調査業務を担当。大学時代、鳥類の研究で「見る」だけでなく声を「聴く」ことの意味も知り、世界が広がったのが原体験。

Kawasaki Yujiro



寺下 史恵

東京勤務。専門は植生。育児と仕事を両立しながら、企業の困りごとと一緒に解決していくことに大きなやりがいを感じる日々。

Terashita Fumie

して活用する仕組みがないためにその場限りになりがちです。それはすごくもったいないと感じます。

——確かに公益性を考えるとつたいないですね。本ブックのテーマであるネイチャーポジティブの視点で考えると、社会課題は他にどんなものがありますか？

寺下 やつぱり、生きものの調査につく予算が少ないのは懸念点です。観光などは投下したお金に対して「これだけの経済効果が出ました」と言えたりしますが、自然環境は成果を数値で示しづらい。ネイチャーポジティブはお金に換算するのが難しいのが課題です。

田中 そもそも、一般の方はそこまで生きものに興味がないという実態があります。工場敷地の調査でただ「こんな生きものが見つかりました」と説明するだけでは、「それで？」となつてしまふ。社内にいるとみんな生きものの好きだから忘れがちですが。

——一般の方は、自然や生きものが大事だとわかつていても、生

活に直結している意識を持ちづら

いのかもしれませんがね。

川崎 やつぱり、自然に触れない限りはわからないと思います。僕自身もそうだったのです。

——そうだとすると、ネイチャーポジティブ・アクションの最初の一步は「触れてもらう」こと？

川崎 そうだと思います。小学校でも中学校でも、自然に触れる経験がやつぱり必要だと思います。僕たちの仕事としては、まず調査をして、少しずつでも自然を残す道を探り、自然と共生する道を進むこと。

田中 そのためにも、まずはちい

かんの知名度を上げていかないと

いけないと思っています。

村島 発信力がないと、いくら志があつて社会を良くしたいと思つても聞いてもらえせんから。

自然共生社会を目指して描く未来

——発信力を持てたら、社会にどんな働きかけをしたいですか？

寺下 提案、です。私は個々の会



ちいかんメンバーの素顔と本音をお届けすべく、社内の企画チーム・上崎聰敏と荻本央が聞き手役を務めました！

応えられる会社になりたいです。

寺下 みんながみんなのためを思つて行動できる社会になるかとい

ちいかんは若い人がどんどん活躍する活気あふれる会社でありたい

と思っています。ちいかんがハブになつて、地域や企業、国がつながりながら自然共生に向けた取り組みが加速していく——そんな未来を描いています！

- ※1 GIS：地理情報システム
 ※2 COP10：2010年に愛知県で開かれた生物多様性条約第10回締約国会議。生物多様性の国際目標などが採択された
 ※3 ABINC：企業緑地の生物多様性保全を評価する認証制度
 ※4 自然共生サイト：環境省が生物多様性保全に貢献する活動の場を認定する制度
 ※5 TNFD：自然関連財務情報開示タスクフォース

ちいかんができる6つのこと

全国に8つの拠点を構え、ネイチャーポジティブな社会の実現に向けて、調査・保全から教育に関わることで幅広い活動を行っているちいかん。ここでは、皆さまのお役に立てる6つの取り組みについてご紹介します。

1. 自然を「見える化」する

候変動や都市開発により自然環境は急速に変化していますが、「どこでどんな生きものが暮らしているか」が把握できなければ、守るべき自然も見えてきません。ちいかんは全国8拠点に生物・GIS※1技術者を配し、森林・河川・都市緑地まで幅広い現場で調査を実施します。植生図や分布図の作成、ドローン撮影やGISによる解析を駆使して自然環境を可視化し、地域の教育機関や学識者とも連携して科学的に裏付けられた調査結果を社会に還元します。難解なデータを誰にでも理解できる形に翻訳し、自然資源の現状と価値を共有することで、行政の政策立案、企業の環境戦略、市民の学びを支援し、未来に向けた意思決定につなげます。

2. 企業・地域の緑地をデザインする

都市化により緑地が減少する中、単なる緑化だけでは多くの課題は解決できません。ちいかんはCOP10※2以前から民間企業のCSR活動に伴走してきました。近年はABINC※3や自然共生サイト※4認定の取得支援、TNFD※5対応の情報開示支援など、新しい制度や要請に応じた支援を展開しています。企業緑地や工場周辺の整備・管理マニュアルの策定に加え、自治体の生物多様性戦略づくりにも多数関与しています。国際動向からローカルな現場までを俯瞰する情報収集力を活かし、「社会と自然をつなぐ緑地」を提案します。こうした取り組みにより、生物多様性に配慮した企業活動を価値あるブランド戦略やネイチャーポジティブに資する企業活動へと転換し、地域に愛される企業づくりをサポートします。

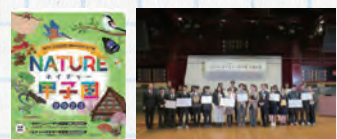
3. 希少種と地域の自然を守る

スワシやオオサンショウウオ、アユモドキなど、希少な生きものは地域の自然の豊かさを示す「指標」です。しかし生息環境の悪化や外来種の侵入により、多くが絶滅の危機に瀕しています。ちいかんは45年以上の調査実績を背景に、調査・保全計画・モニタリングまで一貫通貫で対応します。学識者や行政、NPOと連携し、科学的根拠に基づく効果的な施策を実施します。現場で得られたデータは学術的にも発信し、保全の知見を社会に還元することができます。こうした取り組みにより、貴重な生態系を守るだけでなく、地域社会が、生物多様性を保全することが自分たちの暮らしを支えていくことを実感するきっかけとなります。

4. 里地・里山の持続的な利用を支える

かつて人々の生活と密接に結びついていた里地・里山は、利用の減少や放置により荒廃が進んでいます。ちいかんは里山保全や草原保全の計画策定、外来種対策などを通じて、失われた景観と生物多様性の再生に取り組んでいます。加えて、公園の指定管理事業を担い、地域資源を活かした持続的な管理運営を推進しています。2023年に始動した「ちいかんの森づくりプロジェクト」では、川崎市西黒川地区の雑木林をフィールドに、設立以来45年にわたって培ってきた生きものや環境保全の専門知見を投入しています。人の手が離れて荒れてしまった森を再生する挑戦を通じて、人と自然の新たな関わり方を検証し、未来世代に自然と文化を引き継ぐための仕組みを地域から発信しています。

ちいかんのCSR



ネイチャー甲子園

気候変動や生物多様性への関心が高まる今、国際花と緑の博覧会記念協会と共に自然をテーマにした甲子園を開催。ちいかんは「生きもの調査部門」を担当し、高校生の熱意に応えながら未来の担い手を育てています。



国際貢献:双眼鏡寄付プロジェクト

開発途上国への環境教育支援として、「海を渡れ！双眼鏡プロジェクト」に参加。使用しなくなった双眼鏡を収集し、18台を日本鳥類保護連盟を通じて寄贈。子どもたちが自然と出会う機会を広げています。



緑化運動

都市の自然不足に対応し、ちいかんでは各拠点で緑化活動を展開しています。花壇やピオトップづくり、その地域固有の在来種の活用を通じて地域とつながり、生きものにも人にもやさしい空間を広げています。

ちいかんのネットワーク

支社展開

全国8拠点（東京・北海道・東北・名古屋・大阪・中四国・九州・エスアイエイ環境事務所）に専門技術者を配置。地域の特性を踏まえ、研究機関や環境団体と連携し、環境サービスを広げています。

関連団体

環境保全や企業の生物多様性に関する活動を支えるJEAS・JBIB・NECTA・ABINCの各団体に参加し、各種学会運営も推進。新技術の習得や信頼関係の構築につなげています。

ちいかんメンバーに聞く！

あなたの“押し”は？

百数十人いれば、百数十通りの“押し”がいるもの。ちいかんメンバーに聞いてみると、個性豊かな推しが並びました。魚も鳥も昆虫も植物も、はたまた活動や概念そのものまで。一人ひとりが掲げる推しは、ちいかんがつかないできた自然そのものです。

スタート！



※6 Nature Clips：読みもので、イベントで、そして自然観察のアイテムなど、さまざまな角度から「みなさまに合った自然の楽しみかた」をご紹介します。ご提供しています。
<https://nature-clips.com/>

ちいかんができる6つのこと

5・人と野生動物の共生を実現する

と野生動物の関係をめぐる課題（農作物被害や外来生物の問題など）は各地で深刻化しています。とはいえ、単に駆除するだけでは根本的な解決にならないため、科学的根拠に基づいた長期的な共存の方策が求められます。そこで、ちいかんでは野生生物管理部を設け、従来のフィールド調査に加え、夜間ドローンによる赤外線カメラ撮影や自動撮影カメラ、さらにはAIを用いた獣種識別技術などを活用した調査を進めています。被害マップの作成や地域座談会の開催、共存に向けたルールづくりまで、地域の皆さまと共に解決に向けた取り組みを行っています。また、鳥獣被害対策資材を扱う「鳥獣被害対策ドットコム」を運営し、調査から対策立案・実行、資材提供まで一貫して支援できる体制を整えています。被害軽減にとどまらず、地域社会が野生動物と共に持続的に暮らしている未来を目指しています。

6・自然の価値や魅力を伝え、次世代につなぐ

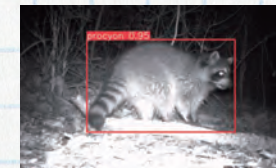
自然の価値は知識として伝えるだけでなく、「体験」として共有することで初めて心に残ります。ちいかんはNature Clips（※6）やネイチャー甲子園（P18参照）、自然観察会や生物多様性セミナーを通じて、自然の魅力を継続的に発信してきました。環境アセスメントや希少種保全、野生動物管理など多様な現場で得た知見を背景に、信頼性の高いコンテンツを提供できるのが強みです。さらに、当社には生物系技術者だけでなくデザイナー、イラストレーター、科学インストラクター出身者など多彩な人材が在籍しており、企業研修やCSR活動の支援でも力を発揮します。専門性とクリエイティブを融合させた情報発信を通じて、社会に対する自然の重要性の理解を深め、次世代へとつなげていきます。

ちいかんの新技術



循環式バードパス

「循環式バードパス」導入支援サービス。生物多様性向上と企業ブランディングに貢献し、「自然共生サイト」等の環境認証取得をサポートします。



AI 獣種判別

トレイルカメラに蓄積される膨大なデータをAIで自動解析し、野生動物の獣種を効率的に判別。環境施策や鳥獣被害対策に貢献します。



ドローン(UAV)

撮影した無数の写真を1枚に繋ぎ合わせて植生状態を把握したり、赤外線カメラを使って夜間に出没する獣類などの行動観察を行います。



株式会社地域環境計画
東京都世田谷区桜新町 2-22-3 NDS ビル
03-5450-3700
<https://www.chiikan.co.jp/>

未来を拓くネイチャーポジティブ・アクション
自然と社会をつなげる仕事

2025 年 11 月 20 日 発行
発行者 株式会社地域環境計画
東京都世田谷区桜新町 2-22-3 NDS ビル
発行人 高塚 敏
制作 地域環境計画 企画部 広報デザインチーム
上崎聰敏 釣谷佳子 永沢敦子 小楠高弘 荻本央

Creative Director : 米津香保里 (スターダイバー)
Art Director : 大橋義一 (gad, Inc.)
Editor : 中西未紀

印刷所 久栄社

編集後記に代えて

「ちいかん」をご存じの方、お世話になっております。
はじめて「ちいかん」を知った方、はじめまして。
ここまでブランドブックをご覧いただき、ありがとうございます。
自然、生きものへの愛、あるいは熱意を持った人たちが、日々「自分にできること」を探して頑張っている会社です。機会があれば、是非それぞれの社員とお話してみてください。「この人と一緒なら自然共生に向けてこんなことができそう」「手始めはこんなことでもいいんだ」など、アイデアが膨らむはずです。
各拠点で、さまざまな環境で、お待ちしております。

本冊子に関するお問い合わせは、下記メールアドレスまで
kikaku-office@chiikan.co.jp

地域環境計画の新しいロゴマーク



マークの左側の曲線は持続可能な社会を、右側の曲線は豊かな自然を象徴しています。当社はその間に立ち、それらを未来へとつなぐ架け橋となります。
さらにこのマークはアルファベットの CHIiKaN をモチーフに構成され、社会と自然をつなぐあらゆる場面に活躍の場をひろげていきたいという、私たちの願いを込めています。コーポレートカラーは青緑色。私たちはこれを唯一無二の「ちいかんアクア」と名付けました。アクアはラテン語で命の根源である「水」を意味します。大地を潤す川とやわらかな風が森を通り抜ける情景を想起させ、自然との共生における多種多様な課題に対して、当社が揺るぎない信頼と誠実な姿勢を持って取り組むことを示します。
新しいロゴは、私たちの誓いそのものです。地域社会と自然を未来へとつなぐ使命を胸に、私たちは挑み続けます。



[表紙・裏表紙 写真]

ちいかんが手がける森づくり

神奈川県川崎市
西黒川特別緑地保全地区

小田急多摩線「黒川駅」から2km 弱
2024 年より管理開始



本冊子は環境に配慮し VOC 成分を含まないインキと FSC 認証紙®を使用しています。